

不思議現象と宗教意識：  
『ダ・ヴィンチ・コード』を題材に

小 城 英 子  
坂 田 浩 之  
川 上 正 浩

**Paranormal Phenomena and the Religious Awareness : On the Subject of  
*The Da Vinci Code***

---

The purpose of this study is to explore the relationship between APPLe (Attitudes towards Paranormal Phenomena Scale) and the religious awareness on the subject of *The Da Vinci Code* of female university students. The result shows that the psychological effect of Paranormal Phenomena is similar to that of religion, but it also suggests that the resistance to a specific religion is related to the belief of Paranormal Phenomena.

## 研究の背景

心霊現象や占い、UFO、超能力など、現代の科学知識では説明がつかない不思議な現象を総括して“不思議現象”と呼ぶ(菊池, 1995)。先行研究で扱われている主な不思議現象は、占い、UFO (Unidentified Flying Object=未確認飛行物体)・宇宙人、霊、超能力、血液型性格判断、前世・輪廻転生、たたり、神仏の存在・願掛け、死後の世界、予言、迷信・縁起、UMA (Unidentified Mysterious Animal=未確認動物)、コックリさんなどである(小城・川上・坂田, 2006)。

小城・坂田・川上(2007)では、不思議現象とマス・コミュニケーションについて、今までの流れと背景を整理し、不思議現象に対する受け手の態度との関連について問題提起を行っているが、先行研究では、不思議現象に対して肯定的なメディアも、不思議現象に対して否定的、または科学的に解明を試みているメディアも、一括されて扱われており、受け手の認知の詳細は明らかにされていない。本稿では、宗教をテーマとしてブームとなった“ダ・ヴィンチ・コード”を題材に、不思議現象に対する態度との関連を分析する。

“ダ・ヴィンチ・コード”とは、2003年にダン・ブラウンによって書かれた長編推理小説(Brown, 2003(越前敏弥訳2004))である。日本では、2004年に角川文庫から出版され、2006年にトム・ハンクス主演の映画が公開された。真偽はさておき、イエス・キリストに子どもがいて子孫が現存するという前提を置いて、レオナルド・ダ・ヴィンチが作品に残した暗号を読み解きながら、殺人事件を解決していくストーリーとなっており、キリスト教の教義に対する科学的解釈がモチーフとして用いられている。オリコンが行った映画“ダ・ヴィンチ・コード”の満足度調査では、魅力

として歴史に対する新解釈のおもしろさなどが挙げられており、また、学生などの若年層よりは、ある程度の知識や教養を備えた社会人に人気が高いことを明らかにしている（映画『ダ・ヴィンチ・コード』ユーザー満足度調査、2007）。しかし、人気の一方で、カトリックを中心とするキリスト教徒からは反発もあり、キリスト教団体が映画の上映禁止を求めた国もある（朝日新聞、2006）。

小城・坂田・川上（2006）が指摘しているように、宗教意識は、人為を超えた存在を前提としている点で不思議現象信奉と共通項を持っている。一方、“ダ・ヴィンチ・コード”のおもしろさは、宗教という不思議現象を論理的に解釈しているところにあり、視聴者の論理的志向性や認知欲求と関わりが深く、“ダ・ヴィンチ・コード”に対する態度と不思議現象に対する態度には何らかの関連があると推測される。しかし、不思議現象信奉と宗教意識を扱った先行研究では、変数として投入されている宗教意識があいまいで、不思議現象そのものと明確な区別がされていなかったり、概念が広範であったりして、明確な規定関係を解明できていない（松井、1997a；水野・辻、1996；中村、1995など）。

本研究では、“ダ・ヴィンチ・コード”を題材として、不思議現象の論理的解釈に対する読者・視聴者の態度を、探索的に解明することを目的とする。

## 方 法

調査対象：東京都内のカトリック系女子大学に在籍する女子（1年生）、第1回調査181名（平均年齢18.20歳）、第2回調査176名（平均年齢18.27歳）、第3回調査175名（平均年齢18.32歳）。回答は無記名であったが、フェイス項目の回答パターンによって、3回の回答者の同定は可能であった。

調査時期：第1回調査（2006年5月26日）、第2回調査（2006年6月16日）、第3回調査（2006年7月7日）

調査方法：1年生を対象とした同一の講義時間中に配布、回収した。回答時間は15～20分であった。

調査内容：第1回調査～第3回調査まで共通して尋ねたのは、(1)ダ・ヴィンチ・コードの書籍および映画の講読・視聴行動（“読んだ（観た）ことがある”，“読んだ（観た）ことはない”の2件法）、(2)周囲の普及度（“ほぼ全部の人が読んで（観て）いる”，“8割ぐらいの人が読んで（観て）いる”“半分ぐらいの人が読んで（観て）いる”，“2割ぐらいの人が読んで（観て）いる”，“ほとんどだれも読んで（観て）いない”の5件法）、(3)講読・視聴者のみ、講読・視聴のきっかけ、それぞれに対する評価（“とてもおもしろかった”～“まったくおもしろくなかった”の4件法）、(4)未講読・未視聴者のみ書籍および映画に対する関心度（“とても読んで（観て）みたい”～“まったく読んで（観て）みたくない”の4件法）、フェイス項目（干支、血液型、携帯電話の会社、誕生日、星座、好きなプロ野球チーム、出身地、靴のサイズ、年齢）であった。共通項目以外で尋ねたのは以下の通りである。

第1回調査：Big Fiveダイジェスト版60項目（和田（1996）を松井（1997b）が選定）、回答は“よくあてはまる”（5点）～“まったくあてはまらない”（1点）の5件法。

第2回調査：APLe（小城・坂田・川上、印刷中）55項目、宗教観尺度（高木・吉田・森、1987）から“心の支えとして宗教を肯定する”10項目、“宗教の弊害を指摘する”10項目、“宗教を人との和や愛情ととらえる”7項目、“宗教を人間の弱さの現れと捉える尺度”から“信仰は、精神安定剤の役割を果たす”の1項目（いずれも“よくあてはまる”（5点）～“まったくあてはまらない”（1点）の5件法）。

第3回調査：情報志向性尺度（鮑戸、1974）4項目、認知欲求尺度（神山・藤原、1991）15項目、オピニオン・リーダー尺度（Solomon, M. R. 1996, ただし杉本徹雄 1997による）を改訂した5項目、ネットワーク人間尺度（松田、1996）10項目、ユニークネス欲求尺度（山岡、1994）25項目、制御欲求尺度25項目（尾関・渡辺・岩永、2002）、独自に作成したキリスト教観尺

度6項目、ダ・ヴィンチ・コードの講読・視聴者を対象にダ・ヴィンチ・コードに対する評価15項目、いずれも回答は“よくあてはまる”(5点)～“まったくあてはまらない”(1点)の5件法。

本稿では、APLeと“ダ・ヴィンチ・コード”を軸に、関連する変数について分析を行う。パーソナル・ネットワークの影響、ユニークネス欲求やオピニオン・リーダー尺度との関連等、流行現象としての“ダ・ヴィンチ・コード”の分析は次回へ譲りたい。

## 結果と考察

### 尺度の確認

#### 宗教観・キリスト教観

高木・吉田・森(1987)から抜粋した宗教観28項目について因子分析(主因子法, Promax回転)を行い, “心の支えとして宗教を肯定する”因子( $\alpha=.903, N=171, M=2.77, SD=0.80$ ), “宗教を人との和や愛情ととらえる”( $\alpha=.845, N=171, M=2.91, SD=0.75$ ) “宗教の弊害を指摘する”因子( $\alpha=.773, N=166, M=2.99, SD=0.65$ )の3因子構造であることを確認した(Table 1)。なお, 高木・吉田・森(1987)では“宗教を人間の弱さの現れと捉える”因子に含まれていた“信仰は, 精神安定剤の役割を果たす”の1項目は, 本研究においては“心の支えとして宗教を肯定する”因子へと統合され, 計11項目となった。

次に, “キリスト教観”6項目について因子分析(主因子法, Promax回転)を行った結果, “キリスト教に関する知識”( $\alpha=.706, N=125, M=2.99, SD=1.00$ )と“キリスト教に対する懐疑”( $\alpha=.709, N=123, M=3.74, SD=0.72$ )の2因子が抽出された(Table 2)。なお, 今回の回答者は, カトリック系女子大学に在籍する学生であり, 一般の大学に比べるとクリスチャンの割合も多く, また, キリスト教系の高校の出身者が多いことから, 諸宗教の中でもキリスト教がもっとも馴染み深く, 知識も豊富である

Table 1. 宗教観の因子分析

|   | 心の支え<br>として宗<br>教を肯定 | 宗教を人と<br>の和や愛情<br>ととらえる | 宗教の<br>弊害 |
|---|----------------------|-------------------------|-----------|
| 信仰心は、心のよりどころや生きがいとなる。                     | .802                 | -.131                   | .142      |
| 信仰によって、自己を内省し、反省することができる。                 | .761                 | .020                    | -.085     |
| 信仰心を持つことによって、自分の考えや主張を確立することができる。         | .685                 | .028                    | -.054     |
| 宗教は、人の手に余る哀しみを和らげ、救いとなる。                  | .675                 | .115                    | .071      |
| 信仰心を持つことによって、心が洗われる。                      | .629                 | .050                    | -.145     |
| 信仰心を持つことで、安らぎや幸せを感じることができる。               | .628                 | .185                    | .081      |
| 信仰は、精神安定剤の役割を果たす。                         | .622                 | -.055                   | .015      |
| 宗教活動によって、皆で同じ体験を共有し、共感することができる。           | .528                 | .189                    | .030      |
| 宗教活動を通じて、信者同士のつながりができ、楽しさを感じることができる。      | .420                 | .355                    | .034      |
| 宗教活動には、活動そのものに一体感があり、充実感を得ることができる。        | .415                 | .375                    | .035      |
| 宗教は、人生観、世界観、価値観の基準を与えてくれる。                | .409                 | .329                    | -.035     |
| 信仰とは、明るく楽しい過程を築き、円満を保つことである。              | .021                 | .730                    | -.076     |
| 宗教心とは、自分の育った土地や風土への愛情を持つことである。            | -.185                | .682                    | .020      |
| 宗教心とは、自分の愛し、信じるものを敬い、重んじることである。           | .022                 | .637                    | .073      |
| 信仰心を持つことによって、人との交わりに我を出さず、和をもって接することができる。 | .279                 | .585                    | -.067     |
| 信仰心を持つことによって、生き物に対し、愛情が深くなる。              | .203                 | .563                    | .059      |
| 信仰とは、感謝する気持ちを学ぶことである。                     | .221                 | .484                    | -.017     |
| 信仰することによって、お互いに助け合う気持ちを養うことができる。          | .300                 | .453                    | -.011     |
| 宗教活動は、金銭に結びつき、営利に陥りやすい。                   | -.108                | .019                    | .693      |
| 宗教組織は、強制的である。                             | -.317                | .180                    | .666      |
| 宗教には、排他性や、他への攻撃性、差別が見られる。                 | -.025                | .101                    | .651      |
| 信仰は、形式的、一時的になりやすい。                        | .021                 | -.001                   | .505      |
| 宗教は、偽善的である。                               | -.302                | .110                    | .487      |
| 信仰は、盲目的で、他を顧みない。                          | .374                 | -.252                   | .482      |
| 宗教活動は、生活を束縛する。                            | .055                 | .065                    | .442      |
| 宗教によって、思想が偏り、物事を客観的、科学的、論理的に見ることができなくなる。  | .235                 | -.087                   | .425      |
| 信仰のために、他に迷惑をかけても気づかなくなる。                  | .268                 | -.060                   | .357      |
| 宗教は、国の考えに影響し、政治に利用され、争いに発展する。             | .249                 | -.255                   | .334      |

Table 2. キリスト教観の因子分析

|   | 知識   | 懐疑    |
|---|------|-------|
| 聖書をじっくり読んだことがある                         | .856 | .135  |
| イエス・キリストに関して、キリスト教で伝えられていることをよく知っている    | .776 | .077  |
| 聖書に書かれている内容は、実際にあったことかもしれないと思う          | .434 | -.351 |
| イエス・キリストに関してキリスト教が伝えていることは、やや脚色されていると思う | .194 | .920  |
| 聖書の内容は、後から作られた部分があると思う                  | .061 | .606  |
| イエス・キリストに関する聖書の記述は史実だと思う                | .398 | -.565 |

Table 3. 宗教観とキリスト教観の相関 (カッコ内は人数)

|                 | 心の支えとして宗教を肯定     | 宗教を人との和や愛情ととらえる  | 宗教の弊害を指摘        | キリスト教に関する知識      | キリスト教に対する懐疑      |
|-----------------|------------------|------------------|-----------------|------------------|------------------|
| 心の支えとして宗教を肯定    | —<br>(171)       | .732***<br>(169) | .212**<br>(165) | .287**<br>(124)  | -.166<br>(122)   |
| 宗教を人との和や愛情ととらえる | .732***<br>(169) | —<br>(171)       | .159*<br>(164)  | .110<br>(124)    | -.236**<br>(122) |
| 宗教の弊害を指摘        | .212**<br>(165)  | .159*<br>(164)   | —<br>(166)      | .000<br>(120)    | .143<br>(118)    |
| キリスト教に関する知識     | .287**<br>(124)  | .110<br>(124)    | .000<br>(120)   | —<br>(125)       | -.238**<br>(123) |
| キリスト教に対する懐疑     | -.166<br>(122)   | -.236**<br>(122) | .143<br>(118)   | -.238**<br>(123) | —<br>(123)       |

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

と考えられる。

“宗教観” 3 因子および“キリスト教観” 2 因子について、相関係数を算出した (Table 3)。宗教観の 3 因子については、すべての因子間に有意な正の相関が見られたが、特に“心の支えとして宗教を肯定する”と“宗教を人との和や愛情ととらえる”との間には、きわめて強い相関が認められた ( $r = .732$ )。キリスト教観 2 因子には、弱い負の相関が認められた ( $r = -.238$ )。すなわち、キリスト教に関する知識が多いほど、キリスト教に



対する懐疑は低くなる傾向があると考えられる。

さらに、“心の支えとして宗教を肯定する（宗教観）”と“キリスト教に関する知識（キリスト教観）”との間に中程度の正の相関が認められた（ $r=.287$ ）。しかし、“心の支えとして宗教を肯定する（宗教観）”と“宗教を人との和や愛情ととらえる（宗教観）”との間の相関は強いにも関わらず（前述），“宗教を人との和や愛情ととらえる（宗教観）”と“キリスト教に関する知識（キリスト教観）”との間には、相関は認められなかった。また、“宗教を人との和や愛情ととらえる（宗教観）”と“キリスト教に対する懐疑（キリスト教観）”との間に中程度の負の相関が認められたが（ $r=-.236$ ）、しかし、“心の支えとして宗教を肯定する（宗教観）”“キリスト教に対する懐疑（キリスト教観）”の間には、相関は認められなかった。すなわち、聖書を読んだことがあるなど、キリスト教に関する知識の多さは、宗教が個人にもたらす心理的効用の理解に結びついているが、キリスト教に対する懐疑は、背景に、宗教に関連した集団活動への警戒心が潜在している可能性が指摘される。

#### ダ・ヴィンチ・コードに対する評価

書籍を講読したか、映画を視聴したことのある回答者に対して尋ねた“ダ・ヴィンチ・コードに対する評価”15項目についても同様に因子分析（主因子法、Promax回転）を行った結果、“真实性”（ $\alpha=.834$ ,  $N=37$ ,  $M=3.72$ ,  $SD=0.79$ ），“宗教学に対する関心”（ $\alpha=.879$ ,  $N=37$ ,  $M=3.16$ ,  $SD=1.00$ ），“キリスト教嫌悪”（ $\alpha=.702$ ,  $N=36$ ,  $M=2.56$ ,  $SD=0.78$ ），“フィクション性”（ $\alpha=.313$ ,  $N=37$ ,  $M=3.35$ ,  $SD=0.75$ ）の4因子が抽出された（Table 4）。

“ダ・ヴィンチ・コードに対する評価”の因子間相関はTable 5に示す。“宗教学への関心”と“真实性”および“キリスト教嫌悪”の間に中程度の正の相関，“キリスト教嫌悪”と“フィクション性”との間に中程度の負の相関が認められた。すなわち，“ダ・ヴィンチ・コード”の書籍また

Table 4. “ダ・ヴィンチ・コード” に対する評価

|  | 真実性   | 宗教学への<br>関心 | キリスト<br>教嫌悪 | フィクシ<br>ョン性 |
|--|-------|-------------|-------------|-------------|
| 「ダ・ヴィンチ・コード」の内容は説得力があると思った                 | .874  | -.119       | .127        | .209        |
| 「ダ・ヴィンチ・コード」の内容は本当かもしれないと思った               | .848  | -.112       | .048        | .352        |
| つまらなかった                                    | -.837 | -.069       | .074        | .142        |
| 「ダ・ヴィンチ・コード」は、真実でなくても、一つの歴史的解釈としておもしろいと思った | .649  | .030        | -.094       | -.130       |
| 内容が難しく理解しにくかった                             | -.454 | -.289       | .077        | .078        |
| キリスト教に親しみを感じた                              | -.171 | .923        | -.315       | .176        |
| 宗教学に、学問としての関心を持った                          | .088  | .881        | -.186       | .133        |
| 歴史学や宗教学の知識や教養が深まった                         | .148  | .707        | .285        | -.116       |
| 宗教の歴史に興味を持った                               | .168  | .631        | .297        | -.191       |
| キリスト教を嫌いになった                               | .102  | -.235       | .844        | -.037       |
| キリスト教の教えに疑いを持つようになった                       | .010  | .323        | .594        | -.022       |
| 内容や描写が怖かった                                 | -.398 | -.192       | .573        | .078        |
| 「ダ・ヴィンチ・コード」は、キリスト教を冒瀆していると思った             | -.208 | .249        | .490        | .394        |
| 「ダ・ヴィンチ・コード」よりも、キリスト教の教義の方を信じようと思った        | -.013 | .132        | -.006       | .771        |
| 宗教や歴史とは関係なく、フィクションとして楽しんだ                  | -.110 | .004        | -.009       | -.429       |

Table 5. “ダ・ヴィンチ・コード” に対する評価の相関 (カッコ内は人数)

|         | 真実性         | 宗教学への関心     | キリスト教嫌悪    | フィクション性    |
|---------|-------------|-------------|------------|------------|
| 真実性     | — (37)      | .482** (37) | .061 (36)  | -.075 (37) |
| 宗教学への関心 | .482** (37) | — (37)      | .343* (36) | -.143 (37) |
| キリスト教嫌悪 | .061 (36)   | .343* (36)  | — (36)     | -.356 (36) |
| フィクション性 | -.075 (37)  | -.143 (37)  | -.356 (36) | —* (37)    |

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

は映画によって、宗教に対する学問的な関心が高まった人ほど、“ダ・ヴィンチ・コード”の内容に真実性を認めており、キリスト教に対してネガティブな感情を持つようになったと考えられる。一方、“ダ・ヴィンチ・コード”をフィクションとして鑑賞した人は、キリスト教に対するネガティブな感情は低く、信仰とは分離して認知していたと推測される。

### その他

APPLE (小城・坂田・川上, 印刷中) の下位因子の信頼性係数は、“占い・呪術嗜好性” ( $\alpha=.924$ ,  $N=169$ ,  $M=2.74$ ,  $SD=0.81$ ), “スピリチュアリティ信奉” ( $\alpha=.897$ ,  $N=162$ ,  $M=3.35$ ,  $SD=0.84$ ), “娯楽的享受” ( $\alpha=.805$ ,  $N=171$ ,  $M=3.02$ ,  $SD=0.85$ ), “懐疑” ( $\alpha=.732$ ,  $N=169$ ,  $M=3.02$ ,  $SD=0.81$ ), “恐怖” ( $\alpha=.716$ ,  $N=172$ ,  $M=2.20$ ,  $SD=0.77$ ), “霊体験” ( $\alpha=.688$ ,  $N=172$ ,  $M=1.99$ ,  $SD=0.76$ ) であった<sup>1)</sup>。

“ダ・ヴィンチ・コード”の未講読・未視聴者に対して、3回の調査で尋ねた書籍や映画に対する関心度計6項目と、認知欲求尺度(神山・藤原, 1991) 15項目の一次元性をそれぞれ確認した ( $\alpha=.935$ ,  $N=62$ ,  $M=2.94$ ,  $SD=0.76$ ;  $\alpha=.841$ ,  $N=125$ ,  $M=3.14$ ,  $SD=0.58$ )。

それぞれ尺度得点/項目数を算出し、以降の分析に用いる合成変数とした。

### 不思議現象に対する態度と“ダ・ヴィンチ・コード”に対する態度との関連

“宗教観”の3因子, “キリスト教観”の2因子, “ダ・ヴィンチ・コードに対する評価”の4因子(書籍・映画の講読・視聴者のみ), APPLE 6因子, “ダ・ヴィンチ・コードに対する関心度”(未講読・未視聴者のみ), 認知欲求尺度の相関係数を算出した(Table 6)。各尺度内の因子間相関は前述しているため、本項では主にAPPLEとの関連について考察を行う。

“宗教観”の下位因子においてAPPLEと多くの相関関係が認められたのは, “心の支えとして宗教を肯定”, “宗教を人との和や愛情ととらえる”

Table 6. APPLE との相関 (カッコ内は人数)

|  |                     | 術占<br>嗜い・<br>呪術<br>性呪 | イ<br>ユ<br>ス<br>ピ<br>リ<br>テ<br>ア<br>リ<br>チ<br>ユ<br>ア<br>リ<br>テ<br>信<br>奉 | 娛<br>楽<br>的<br>享<br>受 | 懐<br>疑          | 恐<br>怖           | 靈<br>体<br>験      |
|--|---------------------|-----------------------|---|-----------------------|-----------------|------------------|------------------|
| 宗<br>教<br>観  | 心の支えとして<br>宗教を肯定    | .316***<br>(167)      | .518***<br>(161)  | .275**<br>(169)       | -.199*<br>(167) | .288***<br>(170) | .316***<br>(170) |
|  | 宗教を人との和や<br>愛情ととらえる | .279***<br>(167)      | .469***<br>(161)  | .198<br>(169)         | -.185*<br>(167) | .254**<br>(170)  | .118<br>(170)    |
|  | 宗教の弊害を指摘            | .116<br>(162)         | .192*<br>(156)  | .268**<br>(165)       | .136<br>(164)   | .263**<br>(165)  | .149<br>(165)    |
| キ<br>リ<br>ス<br>ト<br>教<br>観   | キリスト教に関<br>する知識     | -.038<br>(122)        | .067<br>(118)   | .144<br>(123)         | -.011<br>(124)  | .090<br>(125)    | .130<br>(124)    |
|  | キリスト教に対<br>する懐疑     | -.120<br>(120)        | -.023<br>(116)  | .003<br>(121)         | .102<br>(122)   | -.087<br>(123)   | .023<br>(122)    |
| ダ<br>・<br>ヴィ<br>ン<br>チ<br>・<br>コ<br>ー<br>ド<br>に<br>対<br>す<br>る<br>評<br>価 | 真実性                 | .061<br>(35)          | .398*<br>(35)   | .143<br>(36)          | -.069<br>(36)   | .018<br>(37)     | -.012<br>(36)    |
|  | 宗教学への関心             | .093<br>(35)          | .151<br>(35)  | .311<br>(36)          | -.114<br>(36)   | .132<br>(37)     | .140<br>(36)     |
|  | キリスト教嫌悪             | .499**<br>(34)        | .365*<br>(34)   | .607***<br>(35)       | -.360*<br>(35)  | .375*<br>(36)    | .320<br>(36)     |
|  | フィクション性             | -.195<br>(35)         | -.205<br>(35)   | -.280<br>(36)         | .148<br>(36)    | -.217<br>(37)    | .149<br>(36)     |
|  | 認知欲求                | -.145<br>(122)        | .149<br>(118)   | .093<br>(123)         | -.119<br>(124)  | -.062<br>(125)   | .017<br>(124)    |
|  | 関心度                 | .242<br>(61)          | .313*<br>(59)   | .293*<br>(62)         | -.047<br>(61)   | .059<br>(62)     | .130<br>(62)     |

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

の2因子である。すなわち、宗教に心理的効用や人間関係の円滑化作用を認めている人ほど、占い・呪術やスピリチュアリティに対しても肯定的であると考えられる。この2因子の相違は、“心の支えとして宗教を肯定”は“娯楽的享受”および“霊体験”と中程度の正の相関が認められるのに対して、“宗教を人との和や愛情ととらえる”はいずれとも相関が認められていない点にある。不思議現象をエンターテイメントとして楽しむこと

による気分転換や情緒的解放は、一種の心理的効用と考えられ、宗教による心理的効用と同質のものと思なされた可能性がある。

一方、“宗教の弊害を指摘する”と中程度の相関が認められたのは、“娯楽的享受”と“恐怖”であり、マインド・コントロールや洗脳に対する警戒心が、不思議現象をエンターテイメントとして気軽に楽しむ態度と結びついていることが示唆される。“懐疑”とは、いずれも相関関係は認められなかった。

“ダ・ヴィンチ・コードに対する評価”の下位因子においては、特に“キリスト教嫌悪”とAPPLEとの間に強い相関が認められた（“懐疑”のみ負）。すなわち、“ダ・ヴィンチ・コード”によってキリスト教にネガティブな感情を抱くようになった人ほど、占い・呪術やスピリチュアリティに肯定的であり、懐疑的態度が低く、不思議現象に恐怖も感じつつ、エンターテイメントとして楽しんでいると考えられる。その他には、“真実性”と“スピリチュアリティ信奉”との間に相関が認められており、“ダ・ヴィンチ・コード”の内容に真実性を認める人ほど、スピリチュアリティを信奉する傾向があることが示された。

また、“ダ・ヴィンチ・コードに対する関心度”と、“スピリチュアリティ信奉”および“娯楽的享受”との間に正の相関が認められ、“ダ・ヴィンチ・コード”に関心を持つ人ほど、スピリチュアリティを信奉し、不思議現象をエンターテイメントとして楽しむ傾向のあることが示された。“キリスト教観”および認知欲求はいずれの因子とも相関が認められなかった<sup>2)</sup>。

## 総括と今後の課題

本研究では、不思議現象とマス・コミュニケーションの研究の一環として、2004年書籍が出版、2006年に映画が公開された“ダ・ヴィンチ・コード”を題材に、宗教意識に特化して不思議現象に対する態度との関連を

分析した。その結果、APPLE (小城・坂田・川上, 印刷中) と関連が見られたのは“宗教観”の3因子, “ダ・ヴィンチ・コードに対する評価”の低位因子の“真実性”および“キリスト教嫌悪”, “ダ・ヴィンチ・コードに対する関心度”であった。

占い・呪術, スピリチュアリティ, UFOや霊などは, 宗教と同質のものとして, それぞれ信じることで心理的安定を得たり, 人格的に成長したり, 人間関係の円滑化に寄与する側面が評価されていると考えられる。

一方, “キリスト教嫌悪”もAPPLEと強い相関が認められたことについては以下の2点の解釈が考えられる。第1に, 日本人においては“無宗教の宗教性”に特徴があり, “スピリチュアリティ”といった言葉で表現されるような広範な概念には親和性が高いが, 仏教やキリスト教といった特定宗教の枠組みに対しては警戒心が強いと指摘されている(堀江, 2007)ように, “ダ・ヴィンチ・コード”によってキリスト教に対して嫌悪感を強めた人は, 体系的に確立されている特定宗教ではなく, 身近で手軽な占い・呪術や, 広範な概念のスピリチュアリティ, またはエンターテイメントとしての不思議現象に肯定的な態度を有している可能性がある。第2に, “キリスト教嫌悪”因子の項目には, “内容や描写が怖かった”という項目が含まれていることから, キリスト教自体に対する嫌悪というよりは, 心像鮮明性(vividness of mental imagery)の高い受け手が, “ダ・ヴィンチ・コード”を講読・視聴したことによって鮮明なイメージを喚起され, 情緒的に強い衝撃を受けた可能性もある。心像鮮明性の高い受け手は, 不思議現象に関する番組を視聴したときに, 具体的で生々しい想像をめぐらせ, 視聴したときの感情を繰り返し再体験するために, 不思議現象を信奉しやすいことを示したSparks, Sparks, & Gray (1995)の知見とも整合的である。

今回の調査の回答者は, カトリック系女子大学の学生であり, キリスト教に対して親和度が高く知識が豊富であること, 女性の方が男性よりも, “占い・呪術嗜好性”や“恐怖”が高いこと(川上・小城・坂田, 2006), さ

らに、“ダ・ヴィンチ・コード”の講読・視聴経験のあるサンプルが少なかつたことを踏まえ、結果の一般化には慎重を期する必要がある。しかしながら、逆に言えば、特定宗教にコミットメントが比較的高いサンプルであっても、不思議現象にも宗教と同質の効用を認めている一方、特定宗教に対する警戒心が不思議現象への肯定的態度と結びついている可能性が示唆されたことは、興味深い知見である。

注

- 1) APpleの因子間相関については、小城・坂田・川上（印刷中）において、より大規模なデータに基づいて分析を行っているため、本稿では信頼性の確認にとどめることとする。
- 2) 認知欲求は“心の支えとして宗教を肯定（宗教観）”（ $N=124$ ,  $r=.235$ ,  $p<.01$ ），“キリスト教に対する知識（キリスト教観）”（ $N=125$ ,  $r=.273$ ,  $p<.01$ ）との間に相関が認められている。

引用文献

- 鮑戸弘（1974）. 情報志向バースナリティとマスコミ接触行動 コミュニケーション行動と様式 東京大学新聞研究所（編） 東京大学出版会 123-147.
- 朝日新聞（2006）. 映画「ダ・ヴィンチ・コード」公開 アジア各地「上映反対」カトリック反発 朝日新聞東京本社発行版 夕刊 2.
- Brown, Dan（2003） THE VINCI CODE. Doubleday（越前敏弥（訳）（2004）. ダ・ヴィンチ・コード 角川書店）
- Burger J M and Cooper HM: The desirability of control. Motivation and Emotion, 3（4）: 381-393, 1979. 4) Mills RT, Krantz DS.: Information, 映画『ダ・ヴィンチ・コード』ユーザー満足度調査-ORICON STYLE ORIGINAL CONFIDENCE ニュース. htm（2007）. <http://www.oricon.co.jp/news/ranking/23510/>（2007年9月27日）
- 堀江宗正（2007）. 日本のスピリチュアリティ言説の状況 日本トランスパーソナル心理学・精神医学会（編） スピリチュアリティの心理学 せせらぎ出版 pp. 35-54.
- 川上正浩・小城英子・坂田浩之（2006）. 不思議現象に対する態度（3）不思議現象に対する態度尺度における性差の検討 日本社会心理学会第47回大会発表論文集, 682-683.
- 菊池 聡（1995）. 不思議現象が開く心理学への扉 菊池 聡・谷口高士・宮元

小城英子・坂田浩之・川上正浩

博章(編著) 不思議現象 なぜ信じるのか こころの科学入門 北大路書房  
pp. 1-18.

小城英子・川上正浩・坂田浩之(2006). 不思議現象に対する態度の探索的研究  
聖心女子大学論叢, 107, 17-56.

小城英子・坂田浩之・川上正浩(2007). 不思議現象とマス・コミュニケーション:  
レビューと問題提起 聖心女子大学論叢 108, 35-69.

小城英子・坂田浩之・川上正浩(印刷中). 不思議現象に対する態度; 態度構造  
の分析および類型化 社会心理学研究, 23

神山貴弥・藤原武弘(1991). 認知欲求尺度に関する基礎的研究 社会心理学研  
究, 6, 84-192.

尾関友佳子・渡辺論史・岩永誠(2002). 制御欲求と完全主義がストレス対処過  
程に及ぼす影響 健康心理学研究, 15, 21-31.

松井 豊(1997a). 高校生が不思議現象を信じる理由 菊池 聡・木下孝司  
不思議現象 子どもの心と教育 北大路書房 pp. 15-36.

松井 豊(1997b). 無作為抽出標本に基づく Big Five 尺度の検討1 日本心理  
学会第61回大会発表論文集, 33.

松田義郎(1996). ネットワーク人間と広告情報 日経広告研究所報 166 7-10.

水野博介・辻 大介(1996). 大学生における宗教意識・オカルト関心と情報行  
動一理系・文系学生における調査結果の比較一埼玉大学紀要(埼玉大学教養学  
部編) 32, 1, 1-22.

中村雅彦(1995). 大学生のオカルト信仰に関する研究一オカルト信者の社会心  
理的特性と超心理教育による社会観の変容一愛媛大学教養部紀要(愛媛大学教  
養部編), 28, 1, 29-55.

Solomon, M. R. 1996 Consumer behavior (3rd ed) Prentice Hall. (杉本徹  
雄 1997 対人・集団の要因と消費者行動 杉本徹雄 編著 消費者理解のた  
めの心理学 福村出版)

Sparks, Glenn G., Sparks, Cheri W. & Gray, Kirsten (1995). Media Impact  
on Fright Reactions and Belief in UFOs: The Potential Role of Mental Im-  
agery. *Communication Research*, 22, 3-23.

高木秀明・吉田富士雄・森美奈子 1987 現代大学生の宗教意識(1)-宗教観尺  
度の作成-日本心理学会第51回大会発表論文集, 544.

和田さゆり(1996). 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究,  
67, 61-67.

山岡重行 1994 ユニークネス尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 社会心理学  
研究 9, 181-194.